

自称の獲得

－高校生へのアンケート調査から－

小林 美恵子

1 はじめに

日本人にとって自分をどのようなことばで表すのかは案外難しいことなのではないかと考える。いくつかの事例をあげて説明する。

事例A Aは幼児期、自分を「ボク」と称し、家族からも「ボク」と呼ばれていたが小学校入学前後のある時、家族に向かって「自分はボクではない」と宣言し、自身も「オレ」を使うようになった。現在成人し結婚したAは妻子や親、姉妹の前では「オレ」を使い、年長の親戚や友人と話す時などには「ボク」を用いることもある。Aは筆者の弟である。

事例B Bは幼児期家族から呼ばれた名前をそのまま自称としていた。Bの友達はほとんどは「ボク」を使っていた。保育園年長の5歳の時Bは突然自分を名前で呼ぶことをやめ「オレ」というようになった。親が「オレ」は乱暴な感じだから「ボク」にしたらというところから「子供っぽい」から嫌だと断った。傍で見てみると最初は他の子どもたちから浮き上がって感じられたが、やがて他の子たちの中にも「オレ」と称する者が多くなってきた。ただし彼らも学校で作文を書くときには「ボク」を使っている。先生と話す時は何と言うのかと聞くと、中学生になってからは「オレ」と言うか、または「ジブン」と言うのだそうである。これは中1のわが息子である。

事例C Cは自分の家族と話す時には自称も対称も一切用いない。すべての会話は呼びかけも主語もなく突然に始まるから、周りの人間が誰のことを話しているのかを確認しなくてはならないことも再三である。

いきおい家族との間での話題も限られ、C自身も話すことが億劫なのか、必要最小限のことしか言わない。友人つきあいなどもあまりしない。彼は若いころ結婚前の妻には「ボク」と称し、「自分は関西出身なのでオレは使ったことがない」と言ったことがある。妻は彼が対人関係が苦手なので相手にあわせた自称・対称の使い分けを避けて人につきあわないのではないかとも思っている。電話での同僚との会話から察するところ、職場では彼は「ワタシ」とときには「ワタクシ」を使っているようである。これは実は筆者の夫。

事例D 筆者自身にも実は自称獲得に関してはちょっとした苦労話がある。

筆者すなわちDは少女期を地方の町で育ったが、この土地では女の子は「アタイ」と称するのが普通だった。両親がこの土地出身ではなかったDは家では「アタイ」などということばは野卑なものと禁じられ、また自分自身でもどうしても口から出なかった。かといって「アタシ」「ワタシ」も「お高くとまっている」感じで使いにくい。小学校入学までは「ミエコ」という名を自称としていたが、これは家庭内でのみ通用する語だと心得ていたので、学校で口から出ないように気を使っていた記憶がある。また「アタシ」とも「アタイ」ともつかめように語尾を濁して言っていたことも覚えている。中学生になり、他の友人たちも「アタシ」「ワタシ」というようになってようやくその自称選択の苦痛から開放され、それまでの無口な少女が、とたんにおしゃべりに変身した。

身の周りの例ばかりを長々と上げ恐縮だが、わが家族がきわめて特殊なのだとは思えない。強く意識するしないにかかわらず、このような経験をしている日本人は多いのではないだろうか。

日本語の人称代名詞は、英語などとは違い、絶対的な人称を表す文構成に不可欠な要素とはいえない。話者としての自分と、対する相手や話題となる第三者の関係を表す待遇の役割を担い、互いの関係やそれぞれの置かれた場によって、これに伴う述語の待遇表現とともに選ばなければならない。し

かもその選択の中には「使わないようにする」ということも含まれる。また性別や年齢・立場などによって選ぶべき自称・対称なども変わってくる。これを身につけて自由に駆使することは至難の技といってもよい。

しかし、ことばは自己表現のためにあり、特に自称詞が表現すべき自己を示すことばであることを考えると、幼児は言語獲得の段階で特定の自称詞を持たずにことばを獲得することはできないだろう。日本語圏の一般的な子供は家族に「ボク」と呼ばれたり「〇〇ちゃん」「オネエちゃん」などと名前や親族呼称で呼ばれることによって、その語を自身を示す語として転用する。だが、やがてそれが家族の中でしか通用しない幼児語であることに気づく。いわば待遇意識の芽生えである。前掲の事例A・B・Dのような自称詞獲得の葛藤がはじまるわけである。友人・知人から情報を収集したところでは、男の子の場合、父親が「ボク」という人だと、家庭内では「ボク」を使い続けることが多いようだが、父親が「オレ」を常用していると幼くともすぐに「オレ」を身につける。ただし前者の場合小学生でも兄弟や男の友人どうしでは「オレ」も使うし、後者は先生と話したり作文に書くときは「ボク」と使い分けることになる。葛藤があっても、使い分けに苦労しても、多くはそれなりに自称を獲得していくことになるのだろうが、一つ間違うと事例Cのように口をきかない（きけない）人間ができあがることもある。自己の規定ができないばかりに自己表現が十全にはできないということもあるのではないか。これは子供よりも、自称詞決定に心理的により圧迫がかかる（他からどう見られるか、この場にふさわしいかなどと考えてしまう）おとなのほうに見られる傾向かもしれない。

小林（1997）では、以上のような自称獲得・選択の困難について、職場における男女の自称・対称の使用状況から、どちらかといえば女性より男性のほうに大きいのではないかと論じた。女性が「ワタシ」か、そのくだけた形で音韻的にも似ている「アタシ」のみを使って自己規定ができるのに、男性は「ボク」「オレ」「ワタシ」などそれぞれ印象も丁寧度も違うことばを、話者の年齢や立場、相手との関係によって使い分けなければならない。このことが男性の自己表現の難しさをより大きなものとしていると考えたのである。

小論では、その視点に立って、高校生の自称使用に関してアンケート調査を行った。高校生といえば少年から青年への移行期で、社会的にも子供として容認される部分を残しながら、おとなとしての行動を求められる部分も増えていく時期である。このことは自称詞を含むことばづかいにもいえることで、あまり場を気にせず「ボク」なり「オレ」なりを使っても許されるという状態から、場や相手によって自称を選ぶことや、選んだ自称とも一致する述語の待遇度でしゃべることを求められる（と少なくとも高校生自身がいひ始める）時期である。その意味で日本語自称獲得の時期であるといってもよい。男性ほど極端でないにしても女性にも同じことが言えよう。そこでこの時期の高校生の自称使用を調査することにより、彼らの抱える困難や、ひいては日本語自称の持つ問題点をあぶりだしてみたいと考えた。

2 調査の対象と方法

1997年の9月、東京多摩地区の高校1年生、男性99名、女性97名、計196名に、つぎにあげる①～⑳の20の相手や場面での話で(1)「もっともよく使う自称詞」(2)「使うこともある自称詞」として1～14の選択肢の中から書いてもらった。(2)についてはあれば書く、なければ記入しないと指示をした。相手・場面と、自称詞の選択肢はつぎのとおりである。

（話の相手・場面）

- ①同年齢・同性の友人 ②同年齢・異性の友人 ③同性の先輩
- ④異性の先輩 ⑤同性の後輩 ⑥異性の後輩 ⑦担任の先生
- ⑧担任以外の先生 ⑨父 ⑩母 ⑪兄 ⑫姉 ⑬弟 ⑭妹 ⑮祖父 ⑯祖母
- ⑰親戚や知り合いのおとな ⑱初対面・未知のおとな
- ⑲進学・就職などの面接 ⑳作文

（自称詞…「自分を指すことば」と説明）

- 1. アタシ 2. ワタクシ 3. ワタシ 4. ボク 5. オレ 6. ジブン
- 7. 自分の姓 8. 自分の名 9. 親族関係を示す呼称

10. 愛称（あだ名・ニックネーム） 11. 自称を使わない言い方をする
12. 何というかわからない 13. 該当する人間関係がない・思い浮かばない
14. その他の自称（自由記入）

以上について、高校1年生対象なのでいくつかの指示を与えた。すなわち、

- ・ 話の相手、場面については特定の個人を思い浮かべて考えてもよいし、一般的に自分はどう言うかと考えてもよい。
- ・ ⑨～⑯については、いない場合は13とする。それ以外については、想像想定して書いてもいいし、どうしても相手が思い浮かばなければ13としてもよい。
- ・ 作文の自称については漢字で「私」と書くこともあるだろうが、この場合意識のうえでは「ワタシ」か「ワタクシ」かそれとも別の自称なのかを考えて書くこと。
- ・ 自称詞とはどのようなものかを説明した。特に「ジブン」については「自分でやる」「自分から申し出る」のような副詞的用法をいれないように注意した。また親族関係を示す呼称についても例をあげて説明した。

などである。

3 調査の結果

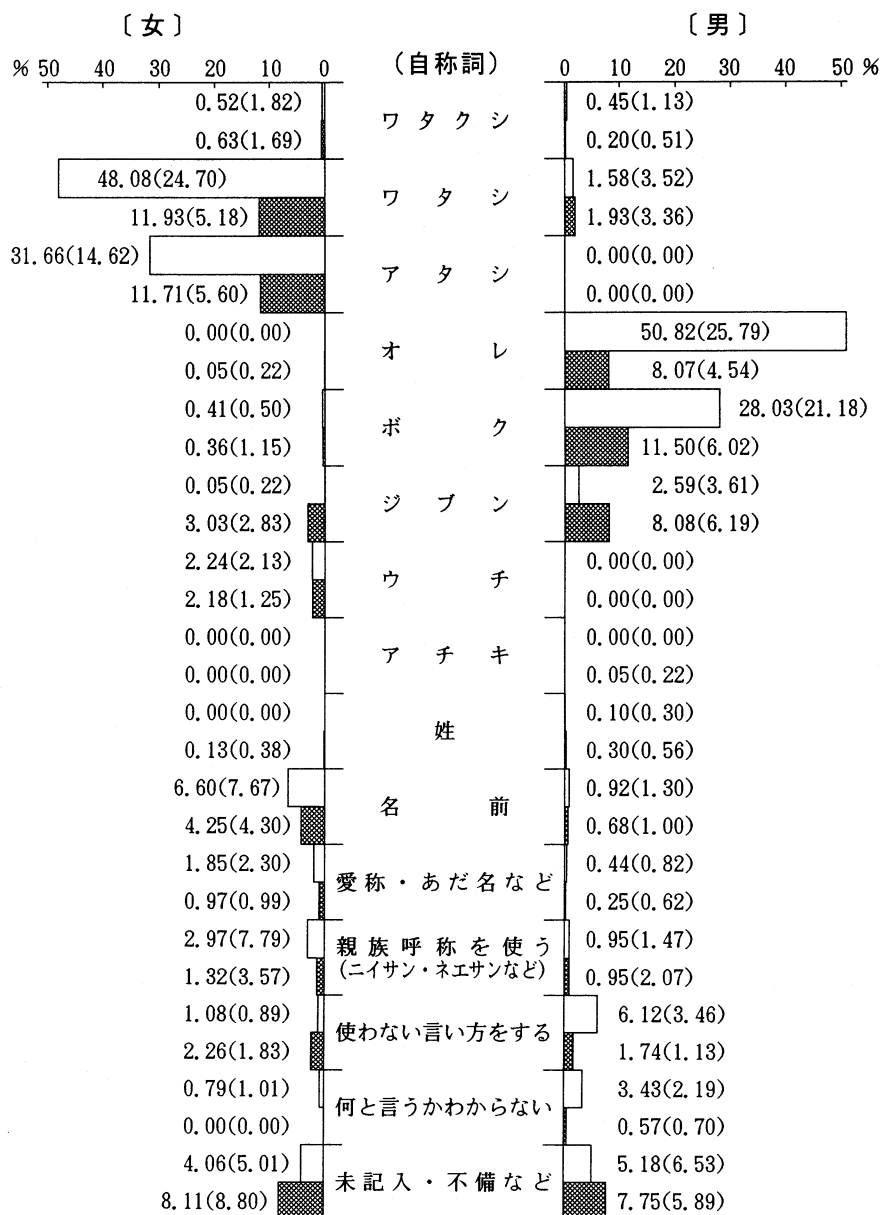
調査の結果をまとめたのが図1及び図2である。14の「その他の自称」については女性に39例の「ウチ」、男性に1例の「アチキ」が現れたのみであった。

3-1 結果の概観

図1はそれぞれの自称の20の相手・場面での平均使用率を表したものである。各自称の上段（白）はもっともよく使う自称としてあげられたもの、下段（黒）は使うこともあるとされたものである。結果は予想どおりだが、女性では「ワタシ」「アタシ」、男性では「オレ」「ボク」が圧倒的に多い。

「ワタクシ」や、成人にはよく使われる男性の「ワタシ」の使用率が低いのは、後に触れる国立国語研究所の結果とも同じで、これらがまだ高校生の使用語彙になっていないことを示しているのであろう。

図1 自称詞の平均使用率（上段…もっともよく使う・下段…使うこともある）



() 内は場面ごとの平均値の標準偏差値である。

もっともよく使われる4語についていえば、女性ではどちらかと言えば丁寧度の高い「ワタシ」の使用が多いのに男性ではむしろ丁寧度は「ボク」より低いと思われる「オレ」が多用されていることに気づく。図中、各使用率の傍らに括弧で示したのは場面ごとの平均値の標準偏差である。すなわち20の相手・場面における選ばれかたのばらつきが大きければ、標準偏差の値は大きくなる。4語の標準偏差を比較してみると、「アタシ」がもっとも低く、どのような場面でも比較的まんべんなく使われているといえる。

ところで、この標準偏差による比較の方法は国立国語研究所の調査「学校の中の敬語」（以下「国研調査」とする）について分析を行った杉戸・尾崎（1997）にならった。国研調査では、東京・山形の中・高校生に6つの場面でのどのような自称を使うかを、13の選択肢をあげ、一つ一つについて使うか使わないかを問うというやりかたで聞いている。このうち東京の男子高校生1,157人、女子高校生1,060人の答えた結果では、男子の「オレ」の使用率50.0%、標準偏差28.8、「ボク」の使用率56.9%、標準偏差21.9。また女子の「ワタシ」の使用率77.2%、標準偏差13.5、「アタシ」の使用率44.8%、標準偏差17.1であった。調査のしかたの違いから、使用率の数値そのものについての単純な比較はできないが、結果にはかなりの差が見られる。杉戸・尾崎（1997）では、「オレ」より「ボク」の平均使用率が大きく標準偏差が小さいことから、「ボク」が比較的誰に対しても使える中立的な表現であり、「オレ」は使える相手・使えない相手の区別が相対的にはっきりしているとする。また、「ワタシ」と「アタシ」についても同様であるとする。

しかし、小論における調査では、まず平均使用率について圧倒的な差で「オレ」がよく使われていること、標準偏差については確かに「ボク」のほうが低いが、「オレ」も国研の調査ほどには場面を選ばず、使われていることがわかる。「ワタシ」についても、平均使用率としては「アタシ」よりよく選ばれているが、場面ごとの使用では、国研調査ほどには中立的に使われているとは言えない。先述のとおり、どのような場面でもまんべんなく使われるのは、むしろ「アタシ」のほうである。以上から本調査では、国研調査よりも概して「オレ」「アタシ」などやや丁寧度の低い表現が場面を選ばず

に使われている傾向が強く現れたと言えよう。

これはなぜか。考えられるのは設定した相手・場面の違いである。図2は本調査において設定した20の相手・場面について女性の「アタシ」「ワタシ」男性の「オレ」「ボク」がどのように現れたかを使用率で示した。国研調査で設定した6場面、(1)同じクラスで一番したい同性のともだち (2)同じクラスで話をする機会の一番多い異性のともだち (3)部活動で話をする機会の一番多い同性の先輩 (4)担任の先生 (5)校長先生 (6)よそからきた知らない人(男)はそれぞれ本調査・図2の①②③⑦⑧⑬の関係にあたる。(本調査で⑧を「校長先生」としなかったのは入学して半年の1年生では校長と直接話したことのある者は少ないし、また想像もしにくいだろうから「わからない」というような解答が多くなることを懸念したためである。)これらは①②を除いては、どちらかといえば、「ワタシ」「ボク」などがよく使われる関係であることが図2からは読み取れる。国研調査で「ワタシ」「ボク」が中立的によく使われるという結果を得たのは、このような関係の範囲において、であった。しかし、実際の言語生活における会話の量としては、友人のほかには家族が多いだろうし、次の項でも述べるとおり、高校生にとって家族に対する場合の自称選択にはなかなか難しさもともなうもののように思われる。

3-2 家庭内での自称

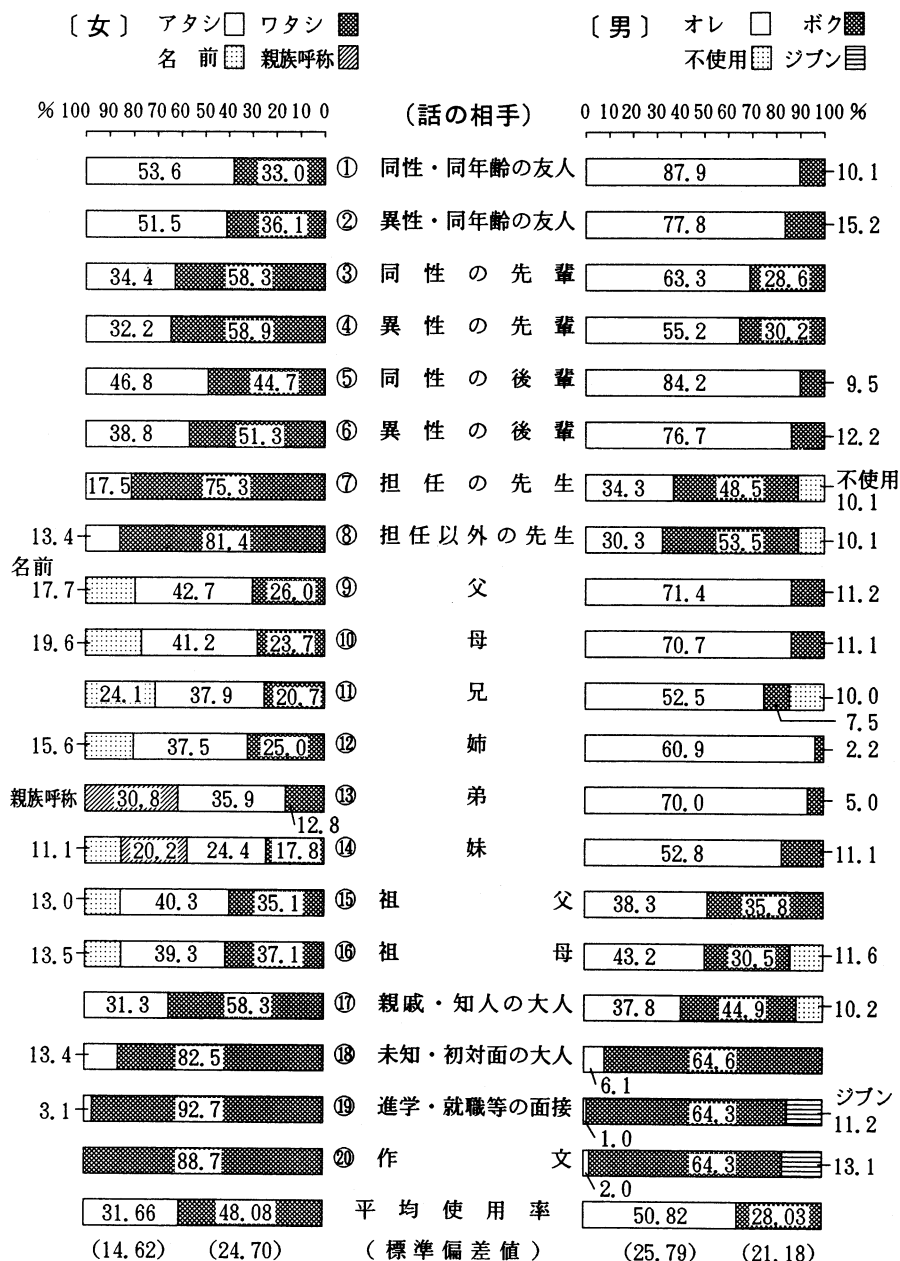
図2によれば「ワタシ」「ボク」があまり使われないのは、同年齢の友人以外に両親、兄弟姉妹等の家族である。友人に対する場合「ワタシ」「ボク」はあらたまりすぎだから、ということか「アタシ」「オレ」を使うものが多い。また友人に対しては、ほとんどの者が「アタシ」「ワタシ」「オレ」「ボク」のどれかの自称を使うとみることできるが、家族の場合は必ずしもそうではない。男女とも家族においては、もっともよく使う自称詞「アタシ」「ワタシ」または「オレ」「ボク」の合計が70%に達しないという関係が多い。残りの30%については他の言い方をしたり、使わずに済ませたり、あるいは考えてみても何と言っているのかわからないというような回答にな

るわけである。図2中には「アタシ」「ワタシ」、「オレ」「ボク」以外で各場面において10%以上の使用率を示したもののみ、あわせて表記した。

女性の場合、祖父母を含めた家族に対しては自分の名前を自称とするという者が目立つ。また弟妹に対しては「ネエサン」「オネエちゃん」等の親族を表す言い方で自称するという者も10%以上いる。男性の場合グラフ中に10%を超えて現れたのは兄と祖母に対する場合の不使用、すなわち使わずに済ませる言い方をするというものだけだが、実は不使用については父6.1%、母6.1%、姉8.7%、妹8.3%、祖父9.9%とほとんどの関係に10%近く現れている。一方、男性にも数はそれぞれ1～3例と少ないが、家族関係を中心に自分の名前、愛称、親族呼称を自称として用いているというものがある。親族呼称については弟妹だけにでなく両親や兄姉に対してまで用いるという者が男女ともにあった。(これは親に「コドモ」兄に「オトウト」と称しているということではないだろう。「オニイちゃん」のような言い方が、一種の愛称として自称化しているのではないかと考えられる。)

家族の中で、子どもが自分の名前、愛称、また親族呼称を自称とするのは、親をはじめとする年長者が自分をそう呼ぶことに端を発しており、多くは家庭内でのみ通用する、いわば幼児的自称である。ある年齢に達した子どもがこのような自称の使用をやめて、より一般的な自称詞に移行しようとするのは先述の事例にも現れたとおり当然の心の動きであろう。しかし言語表現においては相手がどう受け入れるかをも常に考えなくてはならない。特に相手が親しく聞き慣れた呼称を変えるというのは、それがたとえ話し手自身の自称であっても、当事者にとってはなかなか難しい面もあるだろう。家庭内での自称が他の関係に比して、多様であったり、不使用が多かったりするの、高校生の年代が家庭内での幼児的自称から一般的な自称への移行においてさまざまな段階にあり、また、本人の使いたい自称と家族の受け入れに差がある場合などもあり、その結果使いやすい自称を見い出せず使用を避けるということもあるからだと考えられる。

図2 自称詞の使用（アタシ・ワタシとオレ・ボク）



3-3 自称詞「ボク」の特異性

図2を見ると、男性で「ボク」が割合よく使われている相手・場面、⑦⑧⑪⑫⑬⑭⑮などに、自称を使わない言い方をする、とか「ジブン」を使うとした者も比較的多いことに気づく。この他に不使用が5%を超えて現れるのは異性の先輩(5.2%)、先述の祖父母、それに⑮未知・初対面の大人(6.1%)などで、これらも「ボク」がよく使われている相手である。図1に見るとおり男性では平均使用率として6.12%の「使わない言い方をする」という回答があり、「もっともよく使う言い方」としては「オレ」「ボク」について3番目の割合を占めている。そして、それらのほとんどは前述の「ボク」を使う者が多い関係に現れているわけである。なお、これらの相手・場面で「ボク」を使うと答えた者の割合も、同じ関係での女性の自称「ワタシ」に比べると少ない。

「ボク」を使うことが多い(使ったほうがいいと高校生が考えている)のは自分より年上で、両親や兄姉ほどには親しくない、つまりややあらたまった関係の相手ということになる。高校生の接する相手のカテゴリーと丁寧度については小林(1993)において調査・言及したことがあるが、その結果でも、今回「ボク」の多出した関係は、丁寧度高く接する相手として一致している。

しかし、これらの関係での自称の不使用の多さは、「ボク」に、単に「オレ」より丁寧度が高いというだけではない、使いにくさをとまなうニュアンスがあることを示しているのではないか。「オレ」を使うのは相手に対してはばかられる、しかし「ボク」というのも言いにくい、そんな中でのなるべく自称を使わない言い回しを用いて話をするということが起こっているのだろう。もっとも進学・就職の面接のように非常にあらたまった場であるが相手は個人的な知り合いではない場合や、作文のように目の前に相手がいなかった場合には自称の回避は難しくもあるし、個人的な知り合いとしての相手を意識する必要はないので、多少かしこまった自称を用いても気恥ずかしくないということにもなる。そこで、この場合には「ジブン」という自称なども現れることになるわけだ。また場面としてはさほどあらたまではないものの、相手は未知・初対面の大人であるという場合⑮には不使用、「ジブン」が6.1%

ずつ、また「どういうかわからない」というものも9.1%にのぼる。このあたりに「ワタシ」を獲得する以前の若い男性が相手と自分との関係を測りながらさまざまな自称選びをしなくてはならない困難さが現れているように思われる。

なお「ジブン」については、図1に見るとおり、「もっともよく使う自称」としての出現率は高くはないが、「使うこともある」自称としては他に抜きん出ている。これも③(16.3%)④(15.6%)の先輩、⑦⑧(それぞれ17.2%)の先生⑱未知・初対面の大人(11.1%)⑲面接(15.3%)⑳作文(17.2%)などに多く、「ボク」の使いにくさと関連していると考えられる。このような傾向は女性の「ワタシ」や「アタシ」には見られないものである。

では、なぜ「ボク」はそんなに使いにくいのか。これは「ボク」が一般的な自称であると同時に、家庭内で幼児がまず身に付ける幼児自称としての側面を持っているからだと考えられる。名前や愛称で自分を呼ぶことと並んで、多くの男の子はまず「ボク」と自称することからはじめる。子どもたちは成長するにしたがって自分を名前や愛称で呼ぶことをやめ、少なくとも外では「ワタシ」とか「オレ」などの一般的な自称を用いるようになる。このとき「ボク」は使用を否定されるべき幼児自称の側にも、「オレ」よりも丁寧な柔らかい表現としての一般自称の側にもあるわけで、そのどちらを強く意識するかによって使うか使わないかの選択もわかれるのだろう。家庭内の、特に兄弟姉妹との間では「ボク」の使用率が低いことにも、丁寧でない表現が許される関係であるということとともに、このような幼児性脱却の心理の現れを見ることができよう。

女の子の「アタシ」の場合、なぜそのようなことが起こらないのかといえば、一つには一般的な大人の自称である「ワタシ」とどちらかといえば幼児的な自称といえる「アタシ」が音韻的に近くて移行があまり意識されずに容易に行われ得るからだし、また後にも述べる通り、社会的に少女と少年の置かれた位置、要求されるものが違うからとも考えられる。

図1・2で見るとおり、女性の場合、男性の不使用よりさらに高率で自分の名前を自称とすると答えたものがあることがわかる。これは父母、祖父母

などをはじめとする家族を相手とするときに特に多いが、それ以外の友人関係などでも現れる。最近では若い女性たちにこのような自称が流行しているようでもあり、筆者自身も女子高校生が教師である筆者に話すのに「○○子が…」と自称するのを経験しているし、また幼いときから知っている知人の娘（19歳）に、最近久しぶりに会って話していたら、以前は「ワタシ」という自称を使っていたはずのその女性が名前を自称としているのにおや、と思ったということもある。自分の名前を称するのは言うまでもなく幼児的な自称の一つである。女性の場合、強さや自立性よりもかわいらしさや甘えなどが容認されたり、要求されたりという社会的な風潮の中で、家庭内で幼児自称を維持し続けることに抵抗がなかったり、また家庭以外の場合でも自分のかわいらしさを誇示するような一種のファッションとして用いるということが起きているのだと言える。彼女たちが自称をいわば一つの武器として、自分のかわいらしさや、遊び心を表現することもできるのには、いざあらたまった場では迷うことなく使うことができる自称「ワタシ」があるからとも言えよう。

4 まとめ

以上、調査の結果からおもに家庭内での自称と、代名詞「ボク」に絞って分析してみたわけだが、最初に予測したとおり、特に男性の場合、大人としての自称「ワタシ」を獲得する以前の青年期にどのような自称詞を選択するかについてかなり難しい状況にあるとも言えよう。このことは青年期の男性の自己表現にも制約を加えているのではないかと考えられる。中学生・高校生ぐらいだと概して男性よりは女性のほうが話したり、書いたりすることを好むし、また達者でもある。これは単に自称詞の問題ばかりによるのではないかもしれないが、しかし自称詞の使用の自由・不自由の差も原因の一つであるとは言えるだろう。

ちなみに、今回アンケート調査と並行して同じ高校生たちの書いた作文193篇（男性97篇・女性96篇600～800字程度。内容は「高校生活への決意」もしくは「言語伝達についての意見」）について、どのような自称が用いられているか調べてみた。（表）

(表) 高校生の作文に現れた自称詞と文体

性	自称詞	文 体				計 (%)
		ダ・deal(%)	デス・マス(%)	ダ→デス(%)	デス→ダ(%)	
女	私	39 (40.6)	46 (47.9)	3 (3.1)	1 (1.0)	89 (92.7)
	不使用	2 (2.1)	5 (5.2)			7 (7.3)
	計	41 (42.7)	51 (53.1)	3 (3.1)	1 (1.0)	96(100.0)
男	僕	28 (28.9)	26 (26.8)	8 (8.2)	3 (3.1)	65 (67.0)
	私	4 (4.1)	4 (4.1)			8 (8.2)
	自分	4 (4.1)	1 (1.0)			5 (5.1)
	僕→自分	2 (2.1)				2 (2.1)
	自分→僕			2 (2.1)		2 (2.1)
	不使用	12 (12.4)	3 (3.1)			15 (15.5)
	計	50 (51.5)	34 (35.0)	10 (10.3)	3 (3.1)	97(100.0)

この作文においてもアンケート調査の結果と同様に、男性は女性より多様な自称を用い、文中で自称が変わっているものもあることがわかる。自称とともに「だ・である」と「です・ます」がどのように現れるかも調べてみたが、ここでも二つの文体が混交しているものが男性のほうに13例と、女性の3倍以上も現れている。男性に2例「自分」という自称で書き起こし、途中で「僕」に変えたものがあったが、このいずれも、自称の変化にともなって、それまで「だ・である」であった文体が「です・ます」に転換していた。自称のゆれは文体にも影響し、自らをどう称するかが定めにくいとき、文体も定まりにくいといえるのではなからうか。

このようなことは話しことばの場合にもあり得ると考えられるし、その結果、少なくとも獲得期においては自称を定めにくい男性のほうを書いたり話したりに強い制約を受けることが多いと考えられる。男子高校生と話していると、「それは誰が言ったの？」とか「誰がしたことなの？」という具合に相手に問い直しをしないと話の意味がわからないことが多い。彼らはしばしば自称を省略してしゃべるので、誰が言ったことか、したことなのかが相

手に伝えにくく脈略のない文になることがある。いちいち話の筋や会話・行為の主体を確認されて話すのは本人にとっても億劫なことであろうし、「男は無口でも（なほうが）いい」という評価などの助けもあって、しだいに言語表現の苦手な男ができあがっていくのであろう。

現代の日本語では、敬語が変化しつつあり、特に若い世代では謙譲語のみならず尊敬語も使えないという者も増えている。本来の日本語では相手に向かって、むやみに「あなた」「わたし」とはいえない。これを尊敬語や謙譲語で補うことによって行為の主体を明らかにするという、いわばことばの論理性が維持されてきたわけである。しかし敬語が使われなくなるなかで、自称詞・対称詞については旧態然とした待遇表現的用法を維持しなくてはならないとしたら、日本語の論理性は失われ、伝達の機能が落ちることになってしまうだろう。

敬語の変化は社会構造の変化とも関連するからある程度やむを得ないことである。そうなると、自称詞（や対称詞）についても感覚を改めて、できる限り主体を明らかにするような話し方を身につけることも必要だし、そのような視点に立った国語教育、日本語教育もこれからは必要なのではないだろうか。

= 参考・引用文献 =

- 杉戸清樹・尾崎喜光（1997）「待遇表現の広がりとその意識－中高生の自称表現を中心に」『月刊言語』26－6（大修館書店）
- 小林美恵子（1997）「自称・対称は中性化するか」『女性のことば・職場編』（ひつじ書房）
- 小林美恵子（1993）「世代と女性語－若い世代のことばの「中性化」について」『日本語学』12－6（明治書院）